

女神なんてお断りですつ。

7



登場人物紹介

フラム
ティアと誓約している
ドラゴンの子供。
甘えん坊で人見知りな
性格。

ルクス
ティアの専属護衛。
過保護で苦労性な性格。
『未来の夫候補』として
ティアに釣り合う男にな
るべく修業に励んでいる。

ティア

10歳の伯爵令嬢。
前世の行いにより『女神の力』
を得て同じ世界に転生した。
王都の学園に通いながら
冒險者としても活動している。

マティ
伝説の魔獣ディストレアの子供。
普段はただの子犬の
ふりをしている。

シル
影の護衛。
クイグ(牙)と呼ばれる
部隊の三番手で、
先祖の遺志を継いで
ティアに仕えている。

シェリス
ハイエルフの
ギルドマスター。
自称『ティアの婚約者』で、
彼女を溺愛している。

スィール
【神笛】の使い手。
謎の組織『神の王国』に
属し、ティア達と
敵対している。

妖精王
妖精の王にしてダンジョンの主。
ティアの前世の母マティアスとは
浅からぬ仲だったらしい。

カルツオーネ
魔族の王。女性ながら
王子様のようにカッコよく、
老若男女にモテモテ。

サクヤ
獣人族のお姉さん(♂)。
普段は男性として学園で
教師をしている。

目次

第一章	女神が微笑む新たな始まりを	288
第二章	女神の手を取る者達	231
第三章	女神との再会を願う者達	191
第四章	女神と一緒に冒険を	140
第五章	女神は変化を楽しむ	105
第六章	女神と妖精王の <small>えうけい</small> 謁見	72
第七章	女神と天使の再会	43
終 章	女神に与えられた課題	7

第一章 女神が微笑む新たな始まりを

その森は草木が鬱蒼と生い茂り、昼間でも暗く、おおよそ人が近付こうと思える雰囲気ではなかつた。しかし、この森をよく知る者は目ざとく見つけた獣道を通り、その奥へと躊躇なく進む。

森に入つて五分もひた走れば、陽の光が木々の隙間から美しく差し込む幻想的な場所へ辿り着く。六百年を超える長い歴史を持つ隠れ里。古代語で『牙』の名を冠する一族……クイーグの里だ。

森に同化するように設計された大きな門。その前に立つた青年は、静かに開門を待つ。

きつちり一呼吸の後、門がゆっくりと開いた。そこに素早く滑り込むと、彼は目的とする建物へまっすぐに駆け出す。

しかし、唐突に方々から矢やナイフが飛んできた。全て危なげなく避けられ、次いで黒い風となつた人々が様々な武器を手に向かつてくる。それらも上手く躊躇すと、こんな声が聞こえてきた。

「シル、強くなつたなあ」

「なんのつ、まだまだこれからだ！」

「いやあん。また避けられたあ。許せなあいつ」

「反撃ぐらいしなさいよ！」

どれも楽しそうな声だ。だが、それらはまともに受ければ大怪我どころでは済まされないほどの攻撃を仕掛けた後に発せられている。そして、中にはこんな必死な声も交じっていた。

「一撃食らわせたら嫁にするつて約束、守つてよつ」

「ちょっと、抜け駆けは許さないんだから！」

「お前を倒さなきや、俺はあの人に求婚できんのだぞ！」

「頼む、一度死んでくれつ」

最後の方はとばっちりだと、青年……この里で三番目の実力を持つシルは、理不尽さに片眉を上げた。

この里では力こそが全て。立場も結婚相手も力で決まる。そんな里の中心にある里長のための大好きな建物に入れば、シルの周囲にいた人々は残念そうに帰つていった。

毎度のことながら辟易する。帰つてくる度に里の者全員が容赦なく向かつてくるのだ。それは、シル達クイーグ部隊の者が受ける洗礼だった。実力順に一から十までのナンバーを持つ、十人から成る精銳部隊の者は、常に里の者達よりも強者でなくてはならない。

里長の執務室に向かい一つ、シルは一族の歴史について思い出す。全ては、かつて一族を救つた英雄に恩を返すため。ここを里として定めたのも、その人の提案だったという。

赤い髪と瞳を持つハイヒューマン。後にバトラール王国の王妃となつた最強の冒険者、マティアス・ディストニア。クイーグ一族はマティアスが亡くなつた後も、彼女の愛した場所を守りたいと願い、この地で牙を研ぎ続けている。彼女が成したことは一族にとって、それほど大きなものだつたのだ。

シルは建物の中から里を見渡し、半年前に出会つた少女の姿を思い描いた。

濃い茶色の髪と瞳。最近その中に赤が混じつたように見えるのは、彼かの少女の前世の姿を幻視しているからかもしれない。伯爵令嬢ティアラール・ヒュースリーとして転生した彼女は、マティアスの娘でバトラール王国の第四王女であつたサティアの生まれ変わりだ。

サティアは、昏迷していたバトラール王国を滅ぼし、王家に苦しめられていた民達を救つたとされ、後世の人々に『断罪の女神』とも呼ばれている。

「女神……」

クイーグ一族が守護するフェルマー学園。そこに入学してきた当初から、ティアは気になる存在だつた。半年前、ひょんなことからティアに助力を求められ、彼女がサティアの生まれ変わりであると知つたシルは、先祖代々の悲願を叶えた。それ即ち、転生してきたサティアに仕えること。そして今、彼女の傍にあることが幸福だと感じている。

こうして傍にいられない時は、どうしても心が逸る。一刻も早くティアの傍に戻りたい。自分の代わりに用を申しつけられる者がいるかもしれないと思うと、居ても立つてもいられないのだ。ただでさえ、ティアの周りには優秀な者が多い。裏社会での暗躍もできる騎士から、王宮の警備を鼻で笑うメイドまで様々だつた。

「ティア様……」

異常なほどの執着具合に自分でも呆れてしまう。そう思つてゐる頭で、この後ティアのもとへ戻

るには、どういうルートを使うのが最も効率的かを考える。

そうしているうちに、いつの間にか里長の執務室の前まで来ていた。張り巡らされた数々の罠に引つかることなく来られたことに安堵しながら、入室を願い出る。

「シルです」

「……入れ」

扉を開けた途端、特大の水の玉が飛んでくる。それを咄嗟^{とっさ}に分厚い水の膜で包み込んで避けた。すると、それはボールのように弾んで廊下の壁に当たり、跳ね返つて部屋の主の手元に収まる。それを見届けたシルは表情を変えることなく部屋に入り、扉を閉めた。

「ふんっ、面白い対処の仕方だな」

「恐れ入ります」

部屋の主は手にしていた水の玉を蒸発させながら、口角を上げてシルをまっすぐに見る。

「今のは姫の案か?」

「はい。ティア様は跳ね返した水の玉を爆発させて反撃なさっていましたが」

「なるほど。実に彼の姫らしい発想だ」

そう言いながらも、彼がティアをサティアの生まれ変わりだと信じていよいのは明白だ。

「それでなんの用だ? ただ父の顔を見に来たわけではあるまい?」

「もちろんです」

部屋の主は先代のクィーグ部隊の頭領。シルの父親でもある。かつて一番を意味するフィズとい

う名で呼ばれていた彼は、その名と頭領の座をシルの姉に継がせた。

「ほお、相変わらず可愛げのない奴だ。では、わざわざ里にやつてきた用向きを答える」

毎年、数回の帰省は義務づけられているが、誰が好き好んで、それ以外に帰省したいと思うだろうか。一族全員が挑んでくる歓迎イベントは、はつきり言って面倒くさい。やる側は楽しいが、やられる側は堪^{たま}つたものではない。それでも帰省してきたのは、当然ティアのためである。

「隣国ウィストとサガンの内情を調べていただきたい」

「何?」

先日、ドーバン侯爵領の領都を強襲した『神の王国』という組織。今は鳴りを潜めているが、水面下で動いているのは感じられた。それがウィストとサガンの異変だ。ティアは本格的に彼らの情報を得ようと、クイーグの力を頼ることにしたらしい。

「我々は姫の私兵ではないぞ。それを分かつて言つているのか?」

「はい。ですが、サティア様の生まれ変わりであるティア様のご意思。里の者全員で対応するのは当然です」

「はっ、お前はまだそんな戯れ^よ言を信じているのか。お前がシルとしてあの方の幻影を求めるのは、まあ仕方がない。だがな……クィーグが背負うものは幻想のように甘くはない」

殺氣が部屋を満たす。けれどシルは引く気などなかった。誰がなんと言おうと、ティアがサティアであることに変わりはない。その確信が、父の殺氣を打ち消していた。

それが面白いと父は感じたらしい。ふつと気配を和らげ、今度はケツケツと笑い出した。

「くくく、ははは、いいだろう。ただし、お前の幻想が事実だと示してみせろ。そうだな……彼女が本当に姫の生まれ変わりだというのなら、王宮の地下に秘されているものを白日のもとに晒すことができるだろう。精々やらせてみるがいい」

「……承知した」

シルは奥歯を噛みしめる。たとえ父親であっても、ティアを試そうとするなど許されることではない。だが、ティアならばこれを了承するだろう。クイーグの協力を仰ぐための近道であるとすれば受け入れるに決まっている。

必ず一族をティアの前に平伏させてみせる。その強い意志を瞳に宿し、シルは里を後にした。後にこの森で、再び国に混乱をもたらそうとする動きが見え始める時には、まだ誰も気付いていなかつた。



かつてバトラール王国のあつた場所に栄えるフリーデル王国。その王都から少し離れた学園街と呼ばれる街に、フェルマー学園はある。

学園は小・中・高の三つの学部から成り立ち、それぞれの成績優秀者が代表会を運営している。その一員であるティアと級友のキルシュ・ドーバンは、入学式の準備のために一週間前から休み返上で学園に詰めていた。

もうすぐ小学部二年になるティアとキルシュは、この一年で代表会での活動にも慣ってきた。とはいえて現在は、いい加減にしてくれと暴れなくなるほど忙しい。次々と任される多くの雑務のせいで、朝から学園内を走り回っている。

「寮の移動がやっと完了……って、期限ギリギリじゃんっ」

寮に住む生徒達の引っ越しが完了したかと思えば、入学式まであと二日しかない。つい先ほど上がってきた報告書を見て、うんざりという表情でツッコむティア。そんな彼女に、隣を歩きながら書類をチェックするキルシュが顔を上げずに指摘する。

「ティア、素^すが出てるぞ」

「別に、近くに誰もいないんだから良いじやん。あ～あ、やっぱ品行方正な令嬢って損だわあ」「品つ……」

キルシュは思わずティアを見た。ティアは学園ではまさに品行方正、才色兼備な伯爵令嬢として振る舞つており、聖女とまで言われて羨望^{せんぱう}を集めている。

しかし、その実態は気に入らない者はたとえ貴族であるうと叩き潰し、盗賊を玩具^{おもちゃ}か暇潰しの道具としか見ていない史上最年少のAランク冒険者。逆らう者は容赦しない、聖女どころか悪魔と形容されてもおかしくないような本性を隠している。

「何？」

「……いや」

侯爵である父をお仕置きされた過去があるキルシュは、ここは本心を言葉にすべきではないと学

習済みだつた。

そんなキルシユを不審に思いながらも、ティアはつい先日耳にした情報を口にする。

「そういえば聞いた？ 高学部に編入生が二人も入るんだって。それも三年に」

「三年に？ たつた一年だけ在籍するのか？」

「みたい。それも結構な身分らしくて、サク姫ねえさんやウルさんが唸うなつてた」

「先生達が？ それは面倒事がありそうだな」

たつた一年のために編入するというだけでも特殊なのに、更に身分の問題があつては教師達も気が気でないだろう。いくら学園では身分など関係ないとはいえ、生徒自身にその意識を持たせるのには数年を要する。その意識がようやく浸透し、落ち着いた高学部。その最高学年に突然入つてくるというのだ。生徒同士の衝突が容易に予想できた。

「入つてくる人の人柄にもよるけどね。まあ、高学部だし、私達には関係ないでしょ」

「そうだな」

こんな調子で世間話をしながら、小学部の寮へ向かっていたティアとキルシユは、途中でサクヤに出くわした。

茶金色の長い髪と、整つた小さな顔。すらりとした細身の男性教師だ。学園ではカグヤと名乗り、魔術学を担当している。

しかし、その正体は九尾きゅうびの狐の獣人族。教師として生活する時以外は女性に化けている。かつて、ティアの前世の母マティアスと共に『豪風』というパーティを組んでいたサクヤは、本来の姿より

おネエさんである方が自然体でいられるらしい。ティアは前世からサク姫ねえさんと呼んで慕したっていた。

「やつと見つけたつ」

そのサクヤがティアを見つけて捕獲した。それを確認したキルシユは、ティアの手にしていた書類を素早く引き取る。

「こちらは任せろ」

「へ？」

キルシユに見送られ、首を傾げるティアを、サクヤは有無を言わさず学園長室へ連行した。

連行された部屋には苦笑を浮かべる学園長と、ほつとした表情のウルスヴァン・カナートがいた。

ウルスヴァン——ティアがウルさんと呼ぶ彼は、サクヤと同じく魔術学の教師をしている。元は王宮の魔術師長だつたが、年齢と心労を理由に退職し、教師として新たな人生を歩んでいた。

学園長のダンフェール・マランドは、ティアをまっすぐに見つめ、弱った様子でこう切り出す。

「すまないね。君にだけは伝えて欲しいと国王からのお願いでね」

「王様から？」

面倒事の臭においがすると、ティアは少々表情を強張こわばらせた。すると学園長が改まつた口調で言う。

「今度編入してくることになつた、二人の女生徒のうちの一人なのですが……それとなく気を配つてもらえないかとのことです」

「はあ……」

わざわざ王がそう頼んでくるとは。身分が高いというのは噂で聞いているが、一体どこの誰だろうと興味を惹かれた。

「ヒュリア・ウイスト。彼女はとても優秀でしてね。彼のコウザレーヌの国立学園でも、首席だったと聞いています。編入試験の代わりに、あちらで試験を受けていただけましたが、その成績も問題はありませんでした」

フェルマー学園の編入試験は難しいと有名だ。それに合格できる実力があるということは、ティアの兄ベリアローズがそうであつたように、この学園で首位をキープできるだろう。

「ただ、国外からの編入生ということで、生徒達がどのような反応をするのか国王も不安なのでしょう」

「それで、私にフォローを？」

「ええ……君の学園での影響力はかなりのものですから……」

つまりティアがフォローしてくれるのならば、他の生徒達からも自然に受け入れられるだろうと踏んだのだ。

「それとなくは気にしますが、私も人ですから、好き嫌いはありますよ？」

「もちろんです。無理強いはしません」

あまり多くを求められて困る。何より、小学部のティアとは学部が違うので、自然には接点を持てないだろう。そこまで考えて不意に引っかかった。

「……うん？ ヒュリア・ウイスト？ もしかして王女？」

間違いないだろう。ウイストとは隣国の名前だ。そう思つて学園長を見ると、瞬間に目をそらされた。

「学園長……？」

何を誤魔化そうとしているのかと少々睨んでやれば、すぐに降参したようだ。

「あはは。そうなんですよ。ウイストの王女はこの国の王太子と婚約したでしょう。いずれ王妃となるならば、この国のことを探りたいと仰って、急遽編入を希望されたそうです」

「そういうことか……そりや王様が頼むはずだわ」

この国の王がティアを頼るのは不思議なことではない。ティアにはAランク冒険者としての実力があり、また、精霊王達を頼んで使うのを彼も知っている。類い稀なる魔術の才能を有していることもだ。これほど頼りになる者はいないだろう。

そんなティアに、ただの留学生のフォローを頼むのはおかしい。だが、相手が他国の王女であり、先頃決まつた王太子の婚約者となれば、ティアを名指しするのも納得できた。

「分かりました。ところで、王女であることは伏せるのですか？」

「いいえ。わざわざ口にはしませんが、名前はそのまま使われますし、いずれ周知されるでしょう。下手に隠すよりは良いかと。ご本人もそれを了承しています」

「そうですか。その方が私も対処しやすいです」

ティアが学部も学年も違うヒュリアに会いに行つたとしても、相手が王女ならば不思議ではないと生徒達は思うだろう。学園長の覚えも目出度いティアが、個人的にフォローをお願いされたのだ

と理解してくれるはずだ。

そう納得していれば、学園長はついでとばかりに、とんでもないことを言い出した。

「それとですね、ティアさん。突然で申し訳ないのですが、生徒代表として新人生への挨拶をお願いします」

「はい？」

入学式は明後日^{あさつて}。そこで挨拶^{あいさつ}をするのは高学部の最高学年に進級する、代表会の生徒の一人と決まっていたはずである。

「実は決まっていた生徒が辞退しまして、次点の生徒も体調が悪いと……もうそれならばあなたが良いのではないかと学園内外から意見をいただき、決定しました」

「いやいや、決定しましたって……どういうこと？」

説明を求めて学園長は苦笑を浮かべるだけ。ウルスヴァンに至っては絶対に目を合わせないと決めたらしい。そうなると必然的にサクヤに目がいく。

サクヤは学園長とウルスヴァンの様子を確認してから、自分が言うしかないと諦め、口を開いた。

「どうも圧力をかけられたらしいんだ」

今は男性教師として勤務しているので、口調も男らしいものになっている。

「圧力って、挨拶^{あいさつ}するはずだった生徒に？ そんなことするバカがまだ学園にいたの？ あらかた矯正^{きょうせい}し終わつたと思つたんだけどなあ」

良家の子ども達が通うフェルマー学園には、貴族である親達の影響か、驕り高ぶつた生徒や、異

種族を差別する生徒が多かつた。

この一年、ティアは何かにつけて生徒達の意識改革を行つたのだ。それでも駄目な場合は闇討ちまがいのことまでしている。表立つて動く時は、先日卒業していった第二王子エルヴァストと共に行動したので、生徒達は実に素直なものだつた。

何より、真の聖女として神教会の覚えも目出度いティアが『貴族とは』『異種族とは』と説いて回つたため、反発はほとんどなかつたのだ。この成果にはティア自身、拍子抜けも良いところだつた。

「ティアの影響力は学園長のダンが自信を喪失^{そうちつ}するほどだからね。今ならティアが生徒達に一言、愚かな親を倒して家督を奪つてこいつて言えば、二日もしないうちに実行されるだろう。人望つていうより狂信かな」

「そんなんに？ ならそろそろイメージ崩壊のカウントダウンを……」

品行方正な令嬢^{れいわい}という凝り固まつてしまつたイメージのせいで、最近は動きにくうことこの上ない。ティア自身の心の平穀のためにも、このイメージを近々払拭^{ふつしよ}したいと考えていた。しかし、それを学園長のダンフェールが止める。

「やめてください。自死しますよ。私と生徒達が」

最近、ティアの周りでは自殺志願者が多い気がする。冗談か本気かいまいち分からぬ。

「え？ 学園長に死なれるのは……困る？」

「困るに決まってるだろ！ バカ言つてんじゃない！」

疑問形で言つたティアにサクヤが怒鳴る。当の学園長はいじけていた。だが、今はそれより大事なことがあつたとティアは思い出す。

「それで？ 誰が圧力かけたの？」

「その切り替えの早さも相変わらずだな。まあいいや。代表の生徒に圧力かけたバカはね、今度編入してくるローズ・リザラントだよ」

サクヤは不機嫌を顕わに『バカ』と口にした。いつものサクヤならば、どれほどバカな言動をしようと生徒をバカ呼ばわりはしなかつたはずだ。ティアはリザラントの名を頭の中で検索する。『リザラントって確か、公爵家だよね？ 子どもがいるって噂は聞いてないけど？』

現在のフリー・デル王国に公爵家は二つ。そのうちの一つは当主が若く、まだ子どもがいなかつたはずだ。そして、二つ目のリザラント家は随分前に子どもを亡くしていた。王家の血筋から養子をもらうことは許されているが、そんな話も聞いていない。

そこで、ウルスヴァンが静かに口を開いた。

「半年前、リザラント公爵の庶子^{しよし}が見つかったとか。公爵夫妻はこれを受け入れたそうです」

「それがローズ・リザラント？」

「はい。この半年は貴族としての礼儀作法などを、公爵家で教育されていましたよ」

半年間みつちり教養を身につけさせても、同じ貴族の子ども達との交流は必要だ。よつて一年だけでも、と駆け込みで編入を願い出たのだという。しかも驚くべきことに、生徒代表として挨拶^{あいさつ}したいと言つているそうだ。

「でも、その令嬢がなんで編入早々、代表の挨拶^{あいさつ}をしたがるの？」

仮にも生徒の代表としての挨拶^{あいさつ}だ。編入してきていきなりというのが腑に落ちない。これに、サクヤが更に機嫌を悪くした様子で吐き捨てるように答えた。

「なんでも『自分は聖女であり、女神サティアの生まれ変わり』なんだとか。『だからサティアと縁の深いこのフェルマー学園で挨拶^{あいさつ}するのは私』的な発言を、よりもよつて私の前で、それも編入試験も免除させたズルの分際によつ……ダン！ なんであんなバカを編入させたのよつ！」
サクヤは怒りが再燃^{さいねん}したのか、学園長へと詰め寄つていく。完全にカグヤとしての口調からサクヤの口調に変わっているのは、冷静さをなくしてしまつてゐる証拠だ。

一方、ティアは口を半開きにして固まつていた。

「……はあ？」

確かにバカだ。バカ以外の何者でもない。誰がサティアの生まれ変わりだと言つたのだろうか。学園長はサクヤを宥めようと必死になつてゐるので、代わりにウルスヴァンが続けた。

「そのような事情でして、それならば誰からも文句の出ないティアさんにと」「どんどんとばつちりだわ……」

とはいへ、これは仕方がない。ティア自身も納得の指名だ。

こうして入学式の生徒代表挨拶^{あいさつ}はティアに決定したのである。



良く晴れたその日、フリーデル王国の学園街は、常よりも華やかな活気に満ち溢れていた。今日は各学校で入学式が行われるのだ。

フェルマー学園も今年度の新入生を迎へ、現在、その入学式が行われている。

だが、壇上から生徒達に語りかけるのは教師ではない。
その姿を見て、公爵令嬢ローズ・リザラントは愕然としていた。

「美しく澄み渡つたこの空のように、新入生の皆さんのお晴れやかな表情が、これから始まる学生生活への希望を雄弁に物語っています。この学園で得られるのは知識だけではありません。生涯の友人に、尊敬する師や先輩との出会い。それらが皆さんを待っていることでしょう。このフェルマー学園は歴史ある学園です。その学園の生徒であるという誇りを忘れず、またこれから世界を支える者としての責任と信念を持つて、多くのことを学んでください」

壇上で全ての生徒や来賓、父兄達の視線を一身に集めるのは、まだ幼さの残る一人の少女だった。「学園で学んだことは、これから的人生を輝かせる糧となるでしょう。多くの学友との交流も、視野を広げるためには不可欠なもの。一つの考えに固執せず、家々の垣根を越えて考えること。それは人として、この国を背負っていく者として必要な経験なのです。時にぶつかり、和解することも大事な経験であると私は思います。この国の未来のため、世界のために、私達と共に成長していく

ましょう。生徒代表ティアラール・ヒュースリー」

穏やかな微笑みを浮かべたまま美しく礼をする彼女に、会場は割れんばかりの拍手で包まれた。中には感動のあまり号泣している者までいる。そんな一連の栄誉は、本来ならばローズが受けるはずだった。

尊い公爵家の血を引き、女神サティアの生まれ変わりである自分が立つべきだった場所。そこから優雅な足取りで下りてくる少女を、ローズはギリギリと奥歯を噛みしめて睨みつけることしかできなかつた。

苦々しい思いを抱きながら式を終えたローズは、密かに学園街にある宿屋に足を運んでいた。

ローズは公爵の庶子で、つい半年前までは隣国ヴィストの貧しい母子家庭で暮らしていた。しかし半年前、病弱だった母が死してすぐ、神子と呼ばれる少女からの使いが現れた。

彼らは、ローズを実の父であるリザラント公爵と引き合させた。更にローズは『女神サティアの生まれ変わり』であると、神子から託宣を受けたのだ。

目まぐるしく運命が変わったその日の夜、ローズは夢を見た。それは、ローズがサティアとして生きていた過去の情景。反乱軍を率いて城に乗り込んだ時の夢だった。

「本当に、私がサティアなんだ……」

ローズは確信した。間違いく自分がサティアの生まれ変わりであると。そんなローズに神子がこう言ったのだ。

「サティア様。あなたは、^{みずか}自ら望んで再び地上に降りてこられたのです。かつて、彼の国があつた場所。その王家に戻り、世界を平和に導く。それがあなたの運命なのです」

「そう……そうだわ。私はあの場所に戻らなくては……」

その頃、まさに運命であるかのように、王太子が婚約者を探していた。その上、自分は公爵家の令嬢になつたのだ。もはや疑いようもなく、天はその道を示していた。それなのに、それを邪魔する者がいたのだ。

「ウイストの王女が王太子の婚約者ですって？　ははっ、愚かなことだわ。でも私はサティアだもの。あの時も天は試練を課した。これを乗り越えてこそ私の運命ね」

それを裏付けるかのように、公爵はローズを自領に引き取つた後、王妃となつても恥ずかしくない知識や振る舞い方を身につけさせた。国で唯一の学園への入学手続きも取つた今、運命はローズを王太子妃にしようとしているとしか思えない。

「あと、足りないのはそうねえ……優秀な騎士かしら？」

常にサティアに付き従つていた最強の女騎士、アリア・マクレート。そんな存在が手元にいないのは不満だつた。だが、それも近いうちに解消すると神子は言つた。

「サティアである私に天は味方するはず。それなのにつ……」

学園の代表としてローズは挨拶をするつもりだつた。そうすることで、学園の全ての人々に自分の存在を認識させる。誰も無視できない女神の生まれ変わりとして、畏敬の念を抱かせるはずだつた。

しかし、学園から許可は下りず、ふたを開けてみればまだ幼い小学部の少女が代表として挨拶をしたのである。

あの場所と、羨望の視線は、全てローズのものだつたはずだ。

「なんて無礼なつ……屈辱だわ！」

その光景を思い出すと、キリキリと奥歯が鳴る。そこへ待つっていた人物がやつてきた。

「お待たせして申し訳ありません、姫」

「スイール。良いのですよ。あなたと私の仲ではありますんか」

「つ、過分なお言葉、痛み入ります」

まだ十代の幼さを残す黒髪の青年。彼はかつて反乱軍を率いた青年スイールの生まれ変わりだ。

今は剣ではなく、神の魔導具である『神具』を手にしている。だが、今生でもサティアの願う未来のために動いてくれていた。

「それで、計画はどうなっていますか？」

神子が主体となつて活動している『神の王国』という組織。それは、サティアを助ける者達によつて作られたものだ。眞の平和を実現させるため、この世界を神が願う姿へと変えるための実行部隊。きっと彼らは、かつて密かに王国を守つていた、クィーグ部隊の末裔なのだろう。ローズはそう考えていた。

「順調です。新たに『神具』の使い手も見つかつたとジエルバ様が仰つていました。そちらの調査が終わり次第、この国に神の威光を知らしめることができるでしょう」

「ええ、そうね。託宣の方は？」

神子を通じて神教会へと下るされる神託。それを根拠として、ローズを王太子妃にすべきだと王家に伝える手はずになっている。

「そちらは少し時間がかかるかもしません。どうしてか、ここフリーデル王国の神教会は託宣を受け入れないのです」

「……どういうことです？」

スイールの話によれば、フリーデル王国の神教会は『そのような託宣が下るはずがない』と突つぱねているらしい。女神サティアの生まれ変わりであるローズも賛同していると告げても、結果は同じだという。むしろ『それならば尚のこと信じることはできない』と追い返されたそうだ。

「この国にはエルフがおりますし、異種族の悪しき考えが蔓延まんべんしているのでしょうか。ですが、心配はいりません。きっと神のご意思が知れ渡れば、それらも払うことができましょう。そのためにも必ずや今回の計画を成功させてみせます。私は今も昔も変わらず、サティア様に従う者なのですから」

「スイール……そうね。あなたがいれば、きっと成すことができるわ。何より、こちらには天使だつてついているんですねもの」

ローズ達は知らない。おのれの境遇に酔いしれ、思い込みで突き進む先に何が待ち受けているのかを。それが本物のサティアと仲間達の怒りに触れる事になるとは、考えもしなかつたのだ。



入学式が終わり、代表会のメンバーであるティアやキルシユもようやく解放された。その日の午後、二人はヒュースリー伯爵家の別邸で待っていた級友のアデル・マランドと合流し、学園街の地下もぐらへと潜る。

フェルマー学園を創設したフェルマー・マランドと共に、歴史を記録する役割を担になってきた妖精族のシルキー。彼女に会いに、ティア達はたびたびここへやつてきていた。

「ああっ、疲れたあああ」

「お疲れ様、ティア、キルシユ」

アデルがシルキーと一緒にお茶の用意をして勞ねぎらってくれる。フェルマーの子孫であるアデルが手伝ってくれるとあって、シルキーもいつも以上にご機嫌だ。ちなみに今日のお茶請けはストレス発散を兼ねて、昨晩ティアが作った焼き菓子だった。

「ありがとう、アデル」

「すまない」

一息つけたことで肩の力が抜ける。そんなティアを見て、アデルがおかしそうに笑った。

「なんか、ティアって本当にイメージ変わるよね。今日の挨拶あいさつの時なんて、周りのみんなが放心状態じょうたいだったよ？」

「まつたくだな。新人生の父兄など、全員教会の参拝者かと思つたぞ」

その言葉にティアも笑つてしまふ。

「あはは。それは私も思った。すつごい祈つてたよねえ。顔が引きつりそうになつたもん」
壇上からだと、とてもよく見えるのだ。それまで眼そうにしていた者達まで目を見開いて、思わずといったように両手の指を組んでいた。そんな生徒や教師、そして父兄達の様子は、ある意味滑稽だった。

そろそろ免疫ができてきたはずの生徒や教師達でさえそうなのだ。慣れていない父兄はもう仕方がないと割り切つた。しかし、そんな中で目を引いた生徒が二人いた。

「そういえば、例の編入生ってのはどういう人達だつたんだ?」

タイミングの良いキルシユの質問に、ティアは首を傾げた。

「あれ? 興味ないんじやなかつたの? 関係ないつて言つてたじゃん」

高学部の三年ならば自分達には関係ないと話したのは一昨日のことだ。不思議そうなティアに、キルシユは思いつき顔をしかめてみせる。

「バカな編入生のせいで挨拶あいさつをすることになつたと、さんざん愚痴ぐちつたのはどこの誰だ?」

「はい、私です。そつか、気になつちゃつた?」

「当たり前だ」

不貞腐れたようなキルシユの表情を見て、心配してくれたのだと分かり、少し嬉しくなつたのは秘密だ。

「なになに? 編入生?」

アデルも興味津々の様子である。

「そ。高学部の三年生に二人。両方とも女性だよ。一人はローズ・リザラント。リザラント公爵家の令嬢なんだけど、これが高飛車で嫌味な女らしくてね。自分が代表の挨拶あいさつをするつて駄々こねたんだつて。おかげで私がやることになつたのよ」

公爵家の血を引く者であるということをひけらかし、何かにつけて自身が上位であると示したがる傾向があるようだ。

「問題発言も多くて、初日から教師陣が頭を抱えてたわ」

公爵令嬢である自分は優遇されるべきだとか、この学園には自分より身分の高い者はいないのだから従つて当然だとかいう態度。挙げ句の果てに、『私は女神サティアの生まれ変わり』発言である。それは頭も痛くなるというものだ。

「うわあ、ティアがいかにも嫌いそう」

「うん。既に駆逐対象リストに入つてる」

「駆逐くちゆつ……穩便おんびんにな?」

キルシユはそう言うが、腹の立つ貴族の見本みたいなものだ。今すぐ張り倒したいのを我慢できているのは、まだ会つていらないからだろう。

「それで、もう一人は?」

アデルが呑氣のんきに促す。ティアのやることにそれほど間違つたことはないと、アデルは信じて疑わない。ティアが嫌いならば、自分も好きにはなれないと思つてゐるのだろう。

「もう一人はねえ。ウィストの第一王女」

「えつ!?」

「王女様あ!?」

やつぱり驚くよねとティアは笑う。

「元々、色んな国で遊学を楽しまれていたらしくて、最後の一年はいざれ王妃になるこの国で、つてことみたい」

「ふうーん。勉強熱心な王女様だね」

学園長の話を聞いた限り、実際かなり勤勉で真面目な性格らしい。

「まあ、学園長に頼まれたからフォローはするけど、何か起こりそうな場合以外は放つておくつもり」

そう言つた途端、キルシユとアデルは困つたような表情で顔を見合わせる。きっとティアは色々と巻き込まれるだろうな、とそこには書いてあった。

そんな二人の肩にシルキーがそつと手を置く。三人はお茶を堪能するティアを気の毒そうに見つめたのだつた。



ティア達が帰つた後の部屋は静かだ。シルキーは、いつものように部屋の掃除を始める。しかし、

幾分かして来客の気配に手を止めた。

この地下の空間は全てシルキーが管理している。侵入者は即刻叩き出す仕組みだ。万が一にもこの部屋まで辿り着くなんてことは起きない。こちらが招き入れでもしない限り絶対だ。

しかし、例外中の例外がたつた一人だけいる。

その人はコツリコツリと規則正しい足音を響かせながら部屋までやつてきた。

金の眩い髪と、光を反射して色合いを変える鈍色の瞳。白と金を基調とした服は、気高い彼の存在を美しく引き立てていた。

『よう。元気か?』

言葉の響きから、それが人でないことは明らかだ。声帯を通つてはいるが、その声は魂にも届く。そして、彼の背中には美しい透明の羽が二対あった。

『見れば分かりますでしょう。それよりも王。このように何度もおいでになられてよろしいのですか?』

人族には聞こえないシルキーの声も、その人には受け取ることができた。

『構わんさ。我が城は鉄壁。誰も来ることのなくなつた王の間に、ただ座つてているだけでは不健康すぎるだろう』

『……その生活を五百年はお続けだつたはずですが?』

『はつはつはつ……それを言うな!』

この気安い妖精族の王は、つい先日まで引きこもり生活を続けていた。ダンジョンと呼ばれる地

下の迷宮。妖精族はそこを管理し住処としている。この地下の空間もシルキーにとつてのそれだ。

魔力の源である魔素^{まそ}によつて生まれるのは精靈と同じだが、妖精族は精靈と違つて明確な体を持つ。人族と同じく、誰の目にも見える存在としてこの世界に生きている。しかし、その性質から、魔素の多い場所でしか活動できず、地上のどこにでも棲めるというわけではない。

妖精王は、そんな妖精達の棲む場所の魔素^{まそ}を調整する役目を負つていた。

ただし、同じ妖精族でもシルキーだけは違う。彼女達は家に憑き、そこに住まう人々の放つ魔力を魔素代わりにして生き続けるのだ。だから、この場所も妖精王の管理下にはない。

王がシルキーのもとへひよつこりと顔を出したのは、半年ほど前。地下の通路は学園街の下に張り巡らされているだけでなく、少々遠方にある王のダンジョンにも繋がっていたのだ。

『だつてなあ。フィンの奴はフテ寝したまま起きねえし、最近はダンジョンに潜ろうつて気骨のある冒險者もいねえ。それで俺はどう楽しめというんだ?』

簡単に言うと、いい加減に退屈すぎて外出したくなつたのだ。構つてくれる人を求めて彷徨い出したともいえる。何千年と生きる妖精族にとつても、五百年という時間は短くなつたらしい。

『それに、あの子が生まれ変わってきたんだ。早く会いたいじやないか?』

『ならば会わればよろしいのに』

妖精王は昔、娘のように可愛がつていた少女が生まれ変わつたと知つて出てきたのだ。だが、なぜか自分から会おうとはしない。その理由がこれだ。

『俺は妖精王だぞ? ダンジョンのボスだぞ? 冒險者であるあの子が会いに来るまで待つてや

るのが筋つてもんどう』

『……待てなさそそうですけどね』

『だから、それを言うなつてつ』

会いたくて仕方がなくて、自分の存在を思い出して欲しくて、その子の母親から預かっていた物をわざわざ持つてきたのが半年前のことだ。それをシルキーから少女に渡してもらつたのだが、残念ながら気付いてもらえていないらしい。

『会いたいが……今はちよいマズい。やつぱりどうにもきな臭くてな』

王は真面目な顔で腕を組んで唸る。最近、少々気になることがあるのだ。

『……それでは会えるのは当分先ですね』

『だからそれを言うなつてつ。俺だつて傷つくんだからな?』

目下の心配事が解決するまで、あの子をダンジョンには呼べない。大切な少女を危険な目に遭わせることはしたくない。

『そんな傷心の王に、あの子の作った焼き菓子は歯ごたえが癖^{くせ}になるのだ。取つておこうと思つて終わつてしましました』

硬めが好きだというその子の作った焼き菓子は歯ごたえが癖になるのだ。取つておこうと思つても、手を出せばついつい食べ切つてしまう。

『なんでだよつ。残しておけよつ。しまいには泣くぞつ』

『まさか、昨日いらして今日も来られるとは思わないぢやないですか。残念です』

『お前、俺のこと嫌いだろ？』

『……どうなんでしょう？』

『聞くなよつ。ああつ、クソつ、やつぱり、さつさと会いに来いよおおおつ』

嘆く王の声が、その子に届くことはなかつた。



その日の夜。ティアは怒濤のよう過ぎた今日までの日々を思い、別邸のベッドで目を閉じていた。しかし、しばらくして不意に身を起こし、ベッドから出て窓を開ける。

「シリウス」

彼をその名で呼ぶのはティアだけだ。シリウスと呼ばれた黒装束の青年……クイーン部隊の三番手シルは、二階にある部屋にひらりと入ってきた。

「ごめんね。なかなか時間が取れなくて」

「いえ。問題ありません」

ティアは数日前、シルに頼み事をしていた。しかし、それについての報告は入学式が終わって落ち着くまで待つてもらつていたのだ。

「それで、里の方はどうだった？」

ベッドに座り、シルの報告を聞こうと目を向ける。すると、いつも無表情なシルの顔に少しだけ

苛立ちが見えた気がした。

「何かあつた？」

いつものシルらしくない。彼の表情が更に曇る。

「里長は……承服できないと……証を見せるようにと言わされました」

「うん？」

「はい。サティア様である証を……本物のサティア様ならば王宮の地下に秘されているものを白日のもとに晒すことができるだろうと……」

シルは目を細め、ティアから視線をそらす。悔しいと、その顔には書いてあつた。

「なるほどね。まあ、でもそれもそうか。そうそう信じられないよね」

自分がサティアの生まれ変わりであることは分かつてゐるが、それを信じると他人に言うことはできない。過去の出来事を持ればどう知つていても、確かめる術はないし、証とするのは難しいのだ。

未だに周りに言えないのもそれが理由だ。しかし、そんな中でもシルはティアを信じていた。

「そんなことはありません！ 本来ならば、ティア様を疑うなどあつてはならないのですつ」

「いや、無茶だよ？」

そんな指摘もシルには届きそうにない。こんな時の対処法は分かつてゐる。

「それに、無理に協力してもらう必要はないんだ。元々カル姐のところで調査が進んでるみたいだし、何より、私にはシリウスだけで充分だよ」

「つ……」

ティアが隣国のウィストとサガンを怪しいと思ったのは、魔王カルツオーネからもたらされた情報によるものだ。魔族は『神の王国』の魔工師ジエルバを追っている。その過程で『神の王国』がウィストとサガンに拠点を構えていたらしいと知った。人族の国ならば、魔族よりも人であるクレグの方が動きやすいだろうと思つたティアは、里長に協力を頼んで欲しいとシルにお願いしたのだ。

「でも、王宮の地下かあ……ちょっと気にはなつてたんだよね～」「ティア様、ですが……」

何も里長の言うことを聞かなくてもいいとシルは考へてゐるようだ。その顔は実に不満そうに見えた。

「いいのいいの。ちょっととした散策だよ。別に認めて欲しいとかじゃないもん。言つたでしょ？ シルだけでいいんだよ。だいたい、私を試そなうなんて良い度胸だよね～。つてことで、明日にでもエル兄様の様子を見がてら遊んでくるよ」

「はあ……ティア様がよろしいのであれば。ですが、もしその結果、里長がおこがましくも認めるなどと言つてきた場合は、容赦なく切り捨てください。あのような者達、ティア様の傍そばにいるには相応ふさわしくありません」

シルはかなり怒つてゐるようだ。ここまで感情を顕あわにし、言葉にするのは初めてだつた。

「ははつ。うんうん。何度も言うけど、シルだけでいいからね」

「はいっ」

自信満々に返事をするシルを見て、ふと誰かと似似てゐる気がした。だが、上手く思い出せない。だからティアは、誤魔化すように明日の予定を口にする。

「よしっ。それじゃ、明日は王宮探索つ。エル兄様には栄養ドリンクをお土産みやげに持つていこう」

学園を卒業してから毎日、王宮での仕事に忙殺ぼうさつされているらしい第二王子エルヴァスト。ひと月ぶりに顔を見に行くことになるが、果たして元気でやつてゐるだろうかと、ティアは思いをはせるのだった。

◆◆◆

過去の情景はいつも唐突に夢に見る。ティアが女神の力を持つてゐるからなのか、前世の記憶を持つからなのかは分からない。けれど、それはいつも意味なく見られるものではない。決まって何かの暗示なのだ。夢から覚めた時、覚えていられるかどうかは定かでないが、予感として残るものではあった。

これは幼い頃から繰り返されており、それほど珍しいことではない。だが、夢に見るのはティア自身がほとんど関わっていない出来事も多く、いつだつて少し離れた場所から見つめることしかできない。だから、これはきっとティアではなく、世界が記憶してゐる光景なのだろう。

真つ赤な長い髪を揺らしながら王城の廊下を駆けるのは、ハイヒューマンであり、バトラール王国の王妃であるマティアスだ。護衛の騎士達はとても追いつけないが、彼女が向かう部屋は分かつているので、そこに上手く配置された騎士達によつてなんとか規律は保たれている。

その部屋の扉を、声をかけるよりも先に開け、マティアスは中へと入っていく。

マティアスが最初に声をかけた相手は王宮の薬学師だ。

「ライラは大丈夫か?」

中央のベッドに横になつてるのは、白銀に近い金色の髪を枕に広げて荒い息をする、第六王妃のライラだつた。

「い、今、薬を呑んでいただけたところです」

その薬学師の声を合図にライラが目を開ける。薄い青色の瞳は熱に浮かされ、涙で潤んでいた。「つ……マティアス様……子ども達は……」

掠れた声で尋ねるライラに、マティアスは近くまで顔を寄せて優しく答える。

「心配いらない。リュカもシェスカも今日は熱を出していないよ」

「そうですか……申し訳ありません……」

いつもライラは『申し訳ありません』『お手を煩わせてすみません』と、朦朧とした意識の中で

言う。だが、マティアスとしては笑つてくれるだけで充分だ。

六人の王妃の中で最も年下。そんなライラを他の王妃達は皆、妹のように思つてゐる。

体のあまり強くないライラは元々、魔力循環が上手くいつていなかつたのだ。そこへ双子を身ご

もつてしまつた。

双子は昔から高い魔力を持つて生まれてくると言われてゐる。その影響で母体は魔力の循環不良を起こし、産むのにもかなりの負担を伴う。母子共に無事でお産を終えることさえ稀だと言われていた。

だが、王宮に詰めている薬学師や治療師、魔術師達は優秀だ。だから、ライラもなんとか双子を産むことができた。ただし、産後の状態は良いとは言えない。

双子自身も生まれながらに高い魔力を持つことで、それを暴走させやすく、常に命の危険に晒されている。それでも生きているのは、優秀な魔術師達やマティアスのおかげだろう。

「もうお休み。薬が効いてくるまで傍にいてやるよ」

「はい……」

こんな時は夫であるサティルが来るべきなのだが、二日に一度は倒れるような状態のライラのところには、王としての政務もあつて来られない。

何より、サティルは不器用なのだ。貴族達から無理矢理あてがわれた王妃達を愛せず、愛するのだ。特にマティアスを慕つてゐる。だからマティアスもライラが可愛くて仕方がなかつた。

ライラもそれで良いと笑う。王妃達と一緒にいる方が楽しいというのはライラの正直な気持ちなのだ。特にマティアスを慕つてゐる。だからマティアスもライラが可愛くて仕方がなかつた。

「熱が下がつたら、庭園でお茶をしような」

そう言つて頭を撫でると、ほどなくして寝息が聞こえてくる。触れたところから魔力の循環を正常なものへと戻したので、先ほどよりは楽になつたようだ。

「お前達も休め。しばらくは私がついている」

「はい。それでは失礼いたします」

薬学師達も連日のように対応しなくてはならないため、気の休まる時がない。少しでも時間があらならば休んでもらわなくては。

ライラと一人だけになった部屋で、マティアスは呟く。

「……すまない……」

マティアスはこの時、既に気付いていた。自身の余命があと数年もないことに。そして彼女が死ねば、ライラや双子もほどなく限界を迎えるだろう。

「お前を治しても時間が足りない……何より世情がそれを許さない」

ライラを治療するには、エルフの持つ薬学の知識が必要だ。けれど、数年前から人族の国が多くが異種族との交流を制限していた。これにより、エルフ達は自身の知識はもちろん、薬さえ他国に流さなくなつたのだ。

もちろんマティアスと親しいエルフはいるが、マティアスがいるからと言つて一つの国を優遇すれば、それが火種となつて戦が始まる可能性がある。たとえ友人同士であつても、それはやるべきではないとお互い理解していた。

こうした事情のせいでライラを治療する薬は手に入らない。

一方、双子の方はといえば、王家の血によるものか普通の双子より更に魔力が高く、小さな体ではすぐに魔力過剰を起こしてしまう。それを上手く外から操作し、放出してやらなくてはならない状態だ。

その技術は現在、魔術師長とマティアスにしかない。だが魔術師長は高齢で、日に何度も対応できなかつた。

今のうちに他の魔術師達に技を習得させようとしても、対象となる双子と同じくらいか、それを上回る魔力を持つていないと無理なのだ。

「これも魔族に頼めば、なんとかなるかもしれんのにな……」

魔族の子ども達は総じて高い魔力を持つて生まれる。それでも生存できるのは、特殊な魔導具によつてこれに対処しているからだ。しかし、魔族もエルフと同じように魔導具や技術の提供をやめた。魔導具については人族に悪用されないようにと、密かに回収するほどの徹底ぶりだ。

なぜこんなことになつてしまつたのだろうとマティアスは考える。原因として思い当たる者達はいた。かつて交戦したことのある相手。なぜその時、始末しなかつたのか。それを思うと今でも腸はらが煮えくり返る。

『ブルーブラッド』……次があつたなら、必ず息の根を止めてやる』

この世への未練が残りそうな予感に、マティアスは奥歯を噛みしめる。残りの人生、こうして王宮に留まつてゐる状態では、奴らに会える確率はほぼゼロに近い。

「フィズ」

クィーグの頭領の名を呼ぶ。すると、音もなく一つの影が部屋の隅に現れた。

『ブルーブラッド』という組織について調べてくれ。それと、異種族を否定することは不利益でしかないという噂も流せ』

「はっ」

こんなことは、ただの付け焼き刃でしかない。それでも、民達に疑問を抱かせることができだと思う。

「……魔力操作はティアに覚えさせるか。それから、双子が六歳になつたら妖精王に加護をもらうように言つて……」

やれることは沢山ある。マティアスは深く穏やかな寝息を立てるライラの傍そばを離れ、部屋を出ていく。少しでもあがいてみせようと一步を踏み出すのだった。

第二章 女神の手を取る者達

ティアは、新学期の初日の授業を終え、一人王宮へ忍び込んでいた。

「エル兄様の部屋は、つと」

忍び込んだとはいえ気配を完全に消しているわけでも、コソコソと泥棒よろしく静かに動いているわけでもない。気安く街を散策するような足取りだ。肩には学園街からついてきた赤い小さなドラゴンが乗っている。

『キュッ』

『うん。あつちだね。フランも分かるんだ?』

『キューウ』

ティアがフランと呼んだそのドラゴンは、ティアと誓約している歴れつきとした魔獣だ。今は小さくなつてているが、本当の姿は既に成体と同じで、大きな家ほどもある。

ドラゴンは本来、人族が誓約できるような魔獣ではない。だが、運命の采配さいばいとでも言うのだろうか。ティアは前世のフランと出会い、その魂を輪廻りんねの輪に返したのだ。

今は伯爵家の別邸で昼寝をしているであろう、ティアの相棒マティ。最強の魔獣と呼ばれるデイストレアの子どもで、その子の母がフランの前世だ。けれど、ティアと違つてフランはそのことを

覚えてはいない。

つい半年前にその事実を知ったティアは、二匹で楽しそうに遊ぶ様を見て嬉しくなるのだが、それは秘密だ。

「それにしても、なんて分かりやすい配置……仕方ない。ちょっとサービスしてやるか」

警備兵たちの気配を読みながら、王宮全体の配置を頭の中で確認する。城というのはどこもそろ変わらない。どの辺りに謁見の間があり、王の執務室があるか。更に宝物庫や武器庫に至るまでが人員の配置からも推測可能なのだ。

ティアは見つかることなく歩き回る。手には大きな見取り図を持っており、非常に目立つにもかかわらず、一度として見つかりそうになることはなかった。

一時間後、見取り図に警備兵の配置の修正案を記入し終えると、タイミング良く知り合いを見つけて声をかける。

「やつほ、ビアンさん」

「つ、お嬢さん!! ど、どうしてこんな……王宮のど真ん中に……」

そこにいたのは、第二王子エルヴァストの護衛である近衛騎士のビアンだ。エルヴァストが城に戻った今、彼に張りついている必要はなく、父親である近衛隊長から多くの雑務を押しつけられているらしい。ティアとも浅からぬ縁があり、騎士らしく爽やかで気の良いお兄さんだ。

しかし、どうにもティアと話す時は困り顔が多い。

「ちょっと探検してた」

「はあ……どなたの許可で?」

「うーん、私?」

「……そうですか」

こうしたやりとりは、前世で傍にいた女騎士を思い起こせる。

感傷に浸りそうになりながらも、ティアは用件を思い出した。

「これ、良かつたらもらつて」

「なんですか? ……つて、城の見取り図つ!? いや、警備兵の配置図ですか!?!」

ビアンが目を丸くするのも仕方がない。これを描いたティア自身、実際に良くできた見取り図だと思うのだ。

「それと修正案ね。めちゃくちゃ忍び歩きしやすかつたから、つい出来心で」

「出来心でやれる範疇を超えてますから! こ、これをどうしろと!」

ビアンは動搖していた。こんなものを手渡されても怖いと言わんばかりだ。

参考にして、配置し直せつて言つてんの。私って親切でしょ?」

「その親切が怖い……つて、なんでもないです……」

ギロリと音が聞こえるくらい睨んでやれば、ビアンは紙を素早く折り畳んで目をそらした。

今回は聞かなかつたことにしてやろうと、ティアはビアンに背を向ける。

「それじゃ、私は行くね」

「えつ? ど、どちらへ?」

怖々と問いかけてくるビアンに、ティアは少しだけ振り向いて、ウインクしながら素直に教えてやつた。

「エル兄様のところと、ここ地下にね♪」

《キュキュー》

「はい？」

混乱中のビアンを残し、ティアとフラムはまっすぐエルヴァストの部屋に向かうのだった。

やがて休憩しに帰ってきたエルヴァストを、ティアとフラムは部屋でくつろぎながら迎えた。
「あ、お疲れ様あ」

《キュツ》

「ティア!? それにフラムまで……」

さすがのエルヴァストも、まさか自分の部屋でティアが紅茶を淹れてくつろいでいるなどとは想像しなかつたようだ。テーブルの上には、リボン付きの薬瓶が置かれている。

「まあ、こっちでお茶でも飲みなよ。特製の滋養強壮ドリンクも差し入れしとくね」

「あ、ああ……ありがとう」

一体ここはどこだつたかとエルヴァストは内心首を傾げてしまう。椅子に座ると、フラムがあいさつするように肩に止まり、小さな顔をスリスリと頬に擦り付ける。

「ふつ、久しぶりだなフラム」

《キュウ～》

甘えたがりなフラムは、皆の癒やしだ。部屋に入つてきた時のエルヴァストの表情は、ひどく疲れて強張つていたが、それが一気に解れたようだ。

「お仕事、大変みたいだね」

「え? ああ……色々と学ぶことが多い。たつたひと月前までの学生生活が、もう懐かしいよ」

エルヴァストは将来、王となる兄の補佐をする立場になる。そのため、実践して学べとばかりに多くの仕事を回されているらしい。もちろん、王達の指導のもとでだ。

「そつか」

数年前まで、側妃の子である自分は王太子の身代わりでしかないと思つていたエルヴァスト。しかし、冒險者としてBランクに匹敵する実力を身につけた今、誰に言われるまでもなく、何があつても王太子を守り抜いてみせるという強い意志を持つていた。

ただ道具として利用されることを受け入れたのではない。自分自身の意思で決めた生き方だつた。

「それより、ただ私の顔を見に来ただけではないんだろう?」

ティアの淹れた熱いくらいの紅茶を飲み、体に染み込んでいくその温かさを感じながら、エルヴァストがそう尋ねてくる。今度はどんな楽しいことを思いついたのだろうと興味津々な様子が見て取れた。

こんな時、秘密にしたり誤魔化したりするのは卑怯だろう。だから、ちゃんと次の企みを口に

する。

「これからこの地下を探検しようと思つてね」「地下を？ そんなところがある……のか？」

王宮の地下に王族用の脱出路などがあるのは定番だ。だが、エルヴァーストの記憶の中にはなかつたようだ。

「さつきから地下の気配を探つてみてたんだけど、結構怪しい臭いがするね。入り口は宝物庫の隣かなつて思つてるんだけど……どうです？」

ドアの方に目を向けて問い合わせるティア。そこに誰がいるのか、エルヴァーストも気配で分かつたようだ。

「……母上？」

ゆつくりとドアを開けて入つてきたのは、エルヴァーストの母エイミールだつた。

ビアンから、ティアが地下に行こうとしていると聞いたエイミールは、王の許可を取つて仕事を抜け出してきたらしい。普段と変わらない王妃付きのメイド服を着用している。

元々メイドとして王宮に上がつた彼女は、みゆき自ら進んで王妃の影武者となつた。王に見初められて側妃そくひとなつた後も、メイド服を着て王妃の傍そばに控えているのだ。

「どちらで地下の情報を？」

「知り合いから聞いた、つて言つておきます」

「そうですか……」

王家がクィーブ一族のことを把握しているかどうかは微妙だ。シルから聞いた話では、未だ森で隠れ暮らしているらしいので、王家の方から聞かれないと限り言うべきではないだろう。

ただ、メイドでありながら隠密行動も取れるらしいエイミールならば、クィーブ一族のことも知つてゐるかもしれない。

そう思つたティアが曖昧な答えを返すと、エイミールは何かを決意した表情で告げた。

「では、ご案内いたします」

「え、いいの？」

まさか協力してくれるとは思つていなかつた。そこへ、エルヴァーストが申し出る。

「私も行く。よろしいでしようか、母上」

「……」

この二人の互いへの接し方はとても拙く硬い。だが、エイミールがエルヴァーストを大切に思つているのをティアは知つてゐる。エイミールと友人として付き合いのあるティアの父母や、メイドとしての技術を直接指導した家令のリジットから聞いているのだ。

エイミールはエルヴァーストに強くあつて欲しいと考えていた。王宮では様々な人々が勝手な憶測で心ない言葉を口にする。それに負けないよう、不当な扱いをもはね除けられる強さを身につけて欲しいと願い、時に冷たくあしらつていた。

そんな思いを知らないのはエルヴァーストだけ。お互ひを理解するためには、少しでも一緒にいら

れる時間を作ることが必要だろう。だからティアもエルヴァストに加勢する。

「いいよね、エイミールさん」

「……いいでしよう」

渋々といった様子ではあるが、許可をもらえたので良しとする。エルヴァストもほつとしているのが分かつた。

エイミールの案内で部屋を出て、ティアが予想した通り宝物庫の傍まで来た。その横に隠し扉があり、一人ずつ中に入していく。

暗くて狭い通路をエイミールについて進む。少なくとも脱出用の通路ではなさそうだ。脱出用ならば外へ向かうはずが、王宮の中央へと向かっているのだから。

「この先に、一部の者しか知らない特別な部屋があるのです」

「そんなところが？」

エルヴァストは、初めて知る王宮の裏通路に興奮しきりだ。

しばらく歩いていると、床が傾斜になつていてを感じた。どうやら、緩やかに地下へ入つているようだ。

「この辺り……もしかして離宮？」

離宮の下に繋がつているのではないかとティアは見当を付ける。そこで、いつの間にか高くなつた天井に、ふと違和感を覚えた。

灯りが届かないその天井に、何かの模様が見えたのだ。

「あの模様は災厄避けの……まさかつ」

「どうしたんだ？」

ティアは、その模様を知つてゐる。それは、かつて多くの国の王宮にあつた隔離部屋への入り口の印。魔術の影響を受けないための結界のようなものだ。

「あれでお気付きになられるとは……ここは、王宮に生まれた双子を禍とならぬように封じるための離宮です」

「双子がいるのっ？」

目の前に迫つた扉は、冷たい印象のある黒くて大きな扉だ。それに手をかけたエイミールは、苦々しげに顔を歪めて言つた。

「はい……ご存じかもしませんが、王族の子どもは七つの祝福の儀を受けるまでおおがけおおがけわざわざに封じられますが、王族の子どもは七つの祝福の儀を受けるまで公にされることはできません」

「あ……」

エルヴァストが小さな声を漏らす。双子が生まれたことは耳にしていた。だが、まだ幼い弟達の存在を知つてゐるのは王族と一部の貴族達だけだ。

生まれたと聞いた時、同時に王位継承順位についても聞かされた。側妃の子である自分よりも王妃の子である弟達の方が上である。それを聞いた時の衝撃は今でも胸に残つてゐる。

しかし、エルヴァストは一度としてその存在を目にしたことがなかつた。エルヴァスト自身は七つになる前に兄王子と対面してゐたというのにだ。

ゆっくりと押し開かれた扉の中には、地下とは思えないほど明るい部屋がある。

「あちらが、第一王女のイルーシュ様と第三王子のカイラント様です」

二人の子どもが身を寄せ合い、ソファーに埋もれながらこちらを不安げに見ていた。

天蓋付きの大きなベッドに、沢山の玩具ねもいぐとぬいぐるみ。

天井から吊るされた飾りも可愛らしく、見た目はただの楽しそうな子ども部屋でしかなかった。

「双子……」

お人形のように肩まで伸びたストレートの金髪。片方はそれをツインテールにしている。まだ幼い二人の子どもは、手を取り合って縮こまっていた。

「イルーシュ様、カイラント様。お父上とお母上のご友人であるティア様です。それと……私の息子であるエルヴァーストです」

「……」

不安げなその表情をよく見れば、向かって右側にいる子どもは目の色が濃い緑色をした男の子。左の子どもの目は薄い緑色で、髪がツインテールになつてていることから女の子だろう。

そういえば王妃の瞳の色も、母シアンや兄ベリアローズのように美しい緑色をしていたなどティアは思い出す。

「ここには、王様や王妃様が来ることもあるの？」

「王室規定により、会うことはかないません」

立ち読みサンプル はここまで

